

後期古英語における三人称代名詞と指示代名詞の境界

they の発達との関わり⁽¹⁾

小塚 良孝

1. 導入

they (their, them) は古ノルド語からの借入語であるという見方が定説であるが、その一方で古英語の指示代名詞 se (seo, þæt) からの発達とする見方もある。最近、後者の立場に関わって、古英語の三人称代名詞と指示代名詞の相互関係に関する詳細な調査がなされ始めたところだが、まだ十分とは言えない。そこで、本発表では、特に後期古英語において三人称代名詞と指示代名詞がどのような相互関係にあったのかを、指示対象の animacy と両者の選択という観点から、方言や時期の異なるいくつかの文献を調査した結果を基に考察した。

2. 先行研究

they 型が発達した要因については、デーンロー地域におけるデーン人とアングロ・サクソン人の親密かつ長期的な共存とそれによる言語接触と考えるのが最も一般的であるが、内的発達、つまり、古英語の指示代名詞 se の複数形 (þa, þara, þam) からの発達の可能性もたびたび指摘されている (e.g. Cole (2018))。また、いずれの場合も、その背景として、古英語の人称代名詞が抱えていた同音異義衝突 (homonymic clash) を回避しようという治療的動機 (therapeutic motivation) があったと想定されている (e.g. Durkin (2014))。

どのようなプロセスを考えるにせよ、まずは古英語における人称代名詞と指示代名詞の用法に関する詳細な調査が必要であるが、これまで十分なされてこなかった。この観点から、Cole (2018) は、古英語のノーサンブリア方言と中英語の北部方言における両者の用法の連続性に注目し、古英語の se が they 型の起源である可能性を詳細に論じた。また、Kozuka (2018) は、古英語のいくつかの聖書翻訳の調査から、ノーサンブリア方言の Lindisfarne Gospels (London, British Library, MS Cotton Nero D. iv: 以下 Li) の行間注においては、複数形で se が選ばれる傾向が他よりも高いことを指摘し、they 型の萌芽が認められることを論じた。以下の表 1、2 はその調査結果の一部である。

表 1. Li における is, ille, ipse の注解 (Kozuka (2018) に基づく)

	is		ille		ipse	
	sg	pl	sg	pl	sg	pl
he	1467 (93.6)	437 (82.5)	502 (78.9)	284 (59.4)	120 (76.4)	20 (29.0)
se	75 (4.8)	74 (14.0)	109 (17.1)	162 (33.9)	28 (17.8)	31 (44.9)
se ilca	25 (1.6)	19 (3.6)	25 (3.9)	30 (6.3)	8 (5.1)	15 (21.7)
others	1 (0.1)		0 (0)	2 (0.4)	1 (0.6)	3 (4.3)
Total	1568 (100)	530 (100)	636 (100)	478 (100)	157 (100)	69 (100)

*多重注解はそれぞれ個別にカウント (以下同様) **he=人称代名詞、se=指示代名詞、se ilca=指示代名詞+ilc

表 2. Li, Ru1, WSCp, WSH における ille の注解または訳語 (Kozuka (2018) に基づく)

	Li		Ru1		WSCp		WSH	
	sg	pl	sg	pl	sg	pl	sg	pl
he	83 (75.5)	81 (59.1)	78 (88.6)	104 (90.4)	68 (90.7)	93 (93.0)	69 (90.8)	92 (94.8)
se	24 (21.8)	46 (33.6)	9 (10.2)	11 (9.6)	7 (9.3)	4 (4.0)	7 (9.2)	2 (2.1)
se ilca	3 (2.7)	10 (7.3)						
others			1 (1.1)		3 (3.0)		3 (3.1)	
Total	110(100)	137(100)	88(100)	115(100)	75(100)	100(100)	76(100)	97(100)

*Ru1 の範囲 (Mt, Mk 1-2:15, Jn 18:1-3) のみの比較 **文献名の略称については 3.1 節を参照

3. 古英語訳福音書における animacy と指示表現の選択

3. 1 調査概要

調査資料は、Li に加え、Rushworth Gospels (Oxford, Bodleian Library, MS Auctarium D. 2. 19: Farman による Ru1 と Owun による Ru2)、West Saxon Gospels の内、1000 年頃の WSCp (Cambridge, Corpus Christi College, MS 140) と 12 世紀の WSH (Oxford, Bodleian Library, MS Hatton 38) である。Ru1、Ru2 については Skeat (ed.1871-

87) と Tamoto (ed. 2013)、それ以外は Skeat (ed. 1871-87) を用いて用例を収集した。具体的には、ラテン語で三人称代名詞の役割を担う *is, ille, ipse* の翻訳における代名詞の選択と指示対象の animacy (animate/inanimate) の関係を調査した。

3. 2 調査結果

表 3～5⁽²⁾は、調査対象の各文献において *is, ille, ipse* のそれぞれの訳語の総数の内、人称代名詞と *se* の割合を、指示対象が animate と inanimate の場合に分けて示している。用例数が animate と inanimate では大きく異なるので単純な比較はできないが、いずれの福音書においても、指示対象が inanimate の場合に *se* を選択する割合が高くなる。特に、アングリヤ方言の Li、Ru1、Ru2 では、*se* と人称代名詞の選択率は拮抗し、*ille* の訳語では *se* の比率が上回る。一方で、ウェスト・サクソン方言の WSCp と WSH でも、アングリヤ方言の福音書ほどではないが、animate の場合に比べ、inanimate の場合には *se* の選択率は一定の上昇を示すことも注目される。

4. 考察

本調査から、方言により差はあるが、後期古英語において一定の条件下では三人称代名詞と指示代名詞 *se* の交換可能性が高まる様子が窺える。こうした選択の揺れの要因については、Ariel (1990) などによる accessibility theory の見地から検討する余地がある。一方、Kozuka (2018) の結果も踏まえると、Li においては *se* が人称代名詞の代わりに用いられる傾向が最も顕著であるが、こうした使用状況が they 型の発達に何かしら関わったと考えられる。

Cole (2018) は、これまでの代名詞の研究においては人称代名詞だけが切り離されることが多く、それが事態を見えにくくしていたことを示唆する。三人称代名詞と指示代名詞が近い性質を持つことから（松本 (2010)）、they の発達のプロセスを考える際に、人称代名詞以外の代名詞も含めて当時の用法を考察することが重要であろう。

5. 結語

以上のように、本発表では、後期古英語の三人称代名詞と指示代名詞 *se* の用法の境界が、特にノーサンブリア方言による Li において一定の条件下でかなり曖昧になったこと、また、そのことが they の発達に寄与した可能性があることを論じた。

注1 本研究は JSPS 科研費 JP18K00643 の助成を受けている。

注2 本稿の表 3～5 は、紙幅の関係で発表ハンドアウトの図 1～3 を数値化したものである。

References (selected)

- Ariel, Mira (1990) *Accessing Noun-phrase Antecedents*. London: Routledge. / Cole, Marcelle (2018) “A Native Origin for Present-Day English *they, their, them*.” *Diachronica* 35:2 (2018), 165–209. / Durkin, Philip (2014) *Borrowed Words: A History of Loanwords in English*. Oxford: Oxford University Press. / Kozuka, Yoshitaka (2018) “Reconsideration of the Development of English Third Person Plural Pronouns: An Analysis of the Use of Personal and Demonstrative Pronouns in Old English Biblical Glosses” in Michiko Ogura and Hans Sauer (eds.), *Aspects of Medieval English Language and Literature, 197-214*. Frankfurt: Peter Lang. / 松本克己 (2010) 『世界言語の人称代名詞とその系譜：人類言語史 5 万年の足跡』東京：三省堂。 / Skeat, Walter W. (ed. 1871-87) *The Holy Gospels in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions*. Cambridge: Cambridge University Press. [rpt. 1970] / Tamoto, Kenichi. (ed. 2013) *The Macregol Gospels or The Rushworth Gospels: Edition of the Latin Text with the Old English Interlinear Gloss Transcribed from Oxford Bodleian Library, MS Auctarium D.2.19*. Amsterdam: John Benjamins.

表 3. *is* の訳語における代名詞の選択と animacy

	animate			inanimate		
	% <i>he</i>	% <i>se</i>	Total	% <i>he</i>	% <i>se</i>	Total
Li	93.2	5.5	1977	50.4	33.1	121
Ru2	97.2	2.2	1253	62.2	31.1	45
Ru1	95.5	4.1	561	57.4	42.6	54
WSCp	99.0	0.9	1717	72.3	27.7	83
WSH	98.9	1.0	1708	72.3	27.7	83

表 4. *ille* の訳語における代名詞の選択と animacy

	animate			inanimate		
	% <i>he</i>	% <i>se</i>	Total	% <i>he</i>	% <i>se</i>	Total
Li	74.3	21.7	1030	25.3	56.6	83
Ru2	77.0	19.3	579	23.1	55.8	52
Ru1	93.9	5.6	180	38.5	61.5	13
WSCp	97.5	2.5	805	74.2	25.8	62
WSH	97.5	2.5	801	76.7	23.3	60

表 5. *ipse* の訳語における代名詞の選択と animacy

	animate			inanimate		
	% <i>he</i>	% <i>se</i>	Total	% <i>he</i>	% <i>se</i>	Total
Li	63.3	25.7	218	25.0	37.5	8
Ru2	69.3	21.3	127	50.0	25.0	4
Ru1	77.1	11.4	35	50.0	0	2
WSCp	93.2	4.0	177	60.0	40.0	5
WSH	94.7	4.7	170	60.0	40.0	5